

着装と風速に関する研究(第2報) — 最外層衣服の材質と着心地 —

○浦壁俊文子 新潟大教育 高橋頼子

目的 環境気候が身体冷却域付近で、6 m/sec以上の強い風が吹く場合の身体変化のうち皮膚温、温冷感について検討することを目的とし、第1報基礎実験の供試布7種のうち4種でフードつきコートを作製し、成人女子を対象に着用実験をおこなった。

方法 被験者：成人女子28名、着衣：最外層にフードつきコート、材質：シーティング(⑤と略す)コーデュロイ(②)、スエード(③)、ウレタンコーティング(⑦)、条件：温度13±1℃ 湿度75±10% 風速6.6、10.1 m/sec、風向後方より直角、期間1983.10～11月、測定項目：皮膚温 常法5處のほか前額、頸、背、脇腹の9か所、舌下温、温冷感、快適感。

結果 1)風速別皮膚温：風速が6.6から10.1 m/secへ変化すると、上腹は上昇したが他の部位では低下し、低下の度合は材質、部位により異なった。2)材質別、部位別皮膚温：通気性大なる材質②は風の直接あたる側の皮膚温の低下が著しく、その低下度は10.1 m/secの方が6.6よりも著しかった。不通気性の材質⑦は風のあたる側の皮膚温の低下度は小で、体によって流れる風の影響を受け開口部付近の皮膚温の低下が著しかった。通気性小、含気量小なる材質⑤は6.6 m/secでの皮膚温の低下度が6.6から10.1よりも大であったが、ドレープ性大のため開口部付近での皮膚温の低下度は小であった。含気量大なる材質③は6.6から10.1 m/secへの皮膚温の低下度が他に比べ1/2程度であった。3)温冷感と快適感：③は両者とも良好。⑤②は身体冷却域付近の低温強風では耐えられない寒さであり、⑦は風の流入により部分的悪感が著しく不快を感じた。不通気性材質の場合は最外層衣服のほか手袋などで被覆し、袖口、フードの開口部をしぼることが低温強風時の必要条件といえる。